地なるに、向ふの方七八里と思ふ程に、能登國の山を屏風の如くに見る、魚津の海は東よりの入海なり、海中より蒸登る陽氣、向ふの山に映じて、色々の形を見るなり、向ふに當なく、數百千里見はらしたる大海にては、陽氣のぼるといへども、向ふの當無れば映ずることなくして、人の目に見えがたしとぞ覺ゆ、伊勢の桑名の海にも三十年五十年の内には、たま〳〵唇樓を結ぶ事ありといふ、是も向ふに尾張三河の山を受てあるゆゑなるべし、又安藝國にてもたま〳〵は有りと云、是も向ふに山あり、其外の國にては唇氣樓をむすぶ事はまだきかず、奇を好む人は、三四月の頃、越中に遊びて此樓臺を見るべき事なり、

〔嚴島圖會〕〔二〕蓬萊巖　聖崎をはなれて海水のうへにたてり、巖上に古松數株ありて海風にもまれ、容姿おのづから造りなせるがごとし、世に畫がくなる蓬萊山といふものに似たり、故に名とす、また別に蓬萊と稱するものあり、三四月の頃、風恬かに波穩かなる時、此處より浮出づ、その粧ひ金銀瑠璃を以て砂とし、其上松柏生茂り、或は宮殿樓閣の象ありて、其莊嚴たぐへん物なし、光明海上に彩きわたりて次第に消滅す、いまも往々是を見る人あり、多くは丑日に現ずといふ、その由緣を知らず、近世橘南谿が著せる西遊記に、安藝國に蜃樓ありといへるは、恐らくは是をいふなるべし、

〔淇園文集十一〕記伊豫嘉島浦夜海市事

伊豫嘉島浦去宇和島藩城西海岸可六里、寛政元年己酉十二月晦日夜亥刻、海上距岸三四百丈外有一小山浮出、浦民有福松者、初先見之、因呼其弟岩松、出來指示見之、既而居民傳聞、遂盡出觀之、其山高可四丈、山頂有火三塊、其長可二尺、横一尺、其光如燃篝、其左右火著山而不動、中央一火離山而升降不定、山下水際又有數百火、相連成列、亦如篝燈、其火光照耀以映見、其山腹上下數處彷彿類有樹木者、然亦不分明、村民中有膽勇者、棹舟往求之、雖岸況三四百丈許、其所見與岸上所望蜃樓異、